

家庭における非行少年の立ち直り支援についての研究 —少年の親に対する信頼感覚が抑うつに耐える力を増進させる現象の 解明—

研究代表者

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

足立知子

1. 本研究の背景

平成 21 年版犯罪白書によると、非行少年の検挙数は近年、減少傾向にある。しかし、再非行率は平成 9 年から上昇を続け、平成 20 年には 31.2% となっており、一部の非行少年の非行の深刻化が指摘されている。

非行の原因論については、これまで多くの研究が行われてきたが、立ち直りに関する研究は、倫理的問題を伴うため、国内外を問わず非常に少ない。再非行率が上昇し続けている現状を踏まえると、非行に至る原因を探るだけでなく、非行少年の更生を促し、再非行を予防するための支援について検討することも重要な課題である。

非行少年は悩めないとと言われる。それは彼らが悩みや葛藤などを抱えることができないからだと考えられる。これは、自らの抱える問題に直面化できないことを意味する。そこで生まれる不都合を解消するための対処法の 1 つとして、彼らは反社会的な行動を選ぶのである。河野（2003）は、非行少年との面接を通して、非行という不適応行動は、罪の意識の希薄さがあり、その希薄さの根底には自我の脆弱さが潜むと指摘している。

非行少年は衝動性が高く、刹那的で、自らの抱える問題から目を背け、自らの行動の結果を深く考えることが出来ない。このような状態の根底に

あるのが、問題に向き合うことに伴って喚起される不安や悲しみ、自信の喪失といったネガティブな感情に対する耐性の低さである。ネガティブな感情に耐える力はすなわち「悩むことができる心の力（河野，2006）」であり、「抑うつに耐える力」として概念化された（近藤ら，2008）。非行からの立ち直りは、困難から立ち直るという点ではレジリエンスプロセスといえる。しかし、レジリエンスの定義は研究者によって異なり、広く曖昧な概念である。そこで、本研究では、非行少年の様々な特徴の根底にあると考えられる、ネガティブな感情への耐性の低さに着目して検討する。非行からの立ち直り支援のためには、「抑うつに耐える力」の強化要因を探り、強化プロセスを明らかにする必要があると考えられる。

保護処分を受けた非行少年を導き、支えていく中心的な役割を果たすのは家庭である。しかし、事件を起こした少年を抱える家庭の多くは、対応に困り、持て余しているのが実情である。本研究では、「抑うつに耐える力」の強化プロセスとして、非行少年が親から信頼されているという信頼感覚を中心に検討する。非行少年の社会復帰の核となる家庭、中でも、親（主な養育者、以下省略）の影響を検討することで、家庭における非行少年の立ち直り支援について検討していきたいと考えている。

2. 当初の研究計画（概要）および変更点

非行少年とは、社会的に容認されない行動を取る少年のことであり、学校や家庭、地域において法律を破り、補導や逮捕の対象となる、明らかな社会不適応行動がある者を指す。彼らは、明確なルールがあるにも関わらず、それに従うことが出来ず、自分にとって不利な状況に陥るにも関わらず、時にはルールを破ることを目的する。例えば、ルール違反を注意する教師に対して暴力を振るうといった行為は、自己破壊的な側面も併せ持つ。非行少年は、自らの抱える問題を直視できず、行動の結果を深く考えることが出来ない。この根底にあるのが、問題を直視することによって生じるネガティブな感情に対する耐性の低さである。このネガティブな感情に対処する力が、すなわち悩める力、「抑うつに耐える力（近藤ら、2008）」である。本研究では、「抑うつに耐える力」の発達的变化や、強化要因について検討していく。特に、少年自身の、親との間での信頼感覚や、自分自身への信頼感が「抑うつに耐える力」に与える影響について検討していく。

当初の研究計画に加えて、非行少年の不適切な対処行動への固執性に着目し、非行少年の思考や行動の柔軟性の低さ、固執傾向の高さについて検討する。一般的に、人は他者から評価されたい、嫌われたくないという欲求があり、周囲の評価は逸脱行為に対して抑制効果があると考えられる。しかし、非行少年は、逸脱行為が親や友人、教師といった周囲の評価を下げることを分かっているが、逸脱行為をやめない、やめられないという思考や行動への固執性がある。Sampson & Laub (1993) は、「ある一定の条件が整えば、非行や犯罪をしなくなる」という「離脱」の概念を提唱している。つまり、再非行をしないということは「一定の条件が整ったために非行から離脱した」状態であると考えられる。非行少年が非行をしなくな

るということは、それ自体が「離脱」という現象であり、非行少年は逸脱行動を繰り返すという前提のもとで検討を行う必要性があり、思考や行動の固執性について、検討を行う。また、非行少年は、逸脱行為によって評価が下がったり補導されたり、孤立しやすいといった状況の中で、本来生じる葛藤状況を切り捨てることによりやり過ごしていることが考えられる。自分にとって都合の悪いことは考えないといった現実の切り離しによる弊害は、身体への緊張や様々な身体症状に置き換わっている（身体化する）ことが考えられる。身体化とは、防衛機制の一種であり、人は自分の抱えている問題を直視することを避け続けると、身体的な症状として表現するようになるというものである。身体化する場合、子どもの多くは自分では問題を抱えているという意識はなく、無自覚である。非行少年の多くも現実逃避傾向があると考えられ、非行少年の現実逃避傾向が、身体症状に置き換わっているかどうかについても、一般群と比較することで検討する。

3. 調査概要

調査質問紙の配布状況について、Table1 に示す。2010年11月に調査協力先である専門学校にて質問紙調査を行った。授業時間の一部を利用して実施する上で、回答者の負担を減らすために質問紙の構成を変えた3種類の質問紙を用意した。質問紙の構成をTable2に示す。質問紙は授業時間の終わりに実施し、回答は任意とした。授業終了後の休憩時間に質問紙を回収した。

2011年1月には、調査協力先である少年鑑別所に質問紙調査を送り、協議の上、教示内容など、実施方法を決定した。調査は2月から3月にかけて鑑別所職員によって実施し、回答済みの質問紙を郵送にて回収した。

2011年11月から2012年2月、および2012年

10月の2度に渡って、大学生を対象に質問紙調査を行った。実施時間の関係上、質問紙を2種類用意し、実施した。質問紙の構成をTable2に示す。質問紙Dは授業終了前の時間に質問紙を配布し、その場で回収を行った。質問紙Eについては、授業終了時に配布し、持ち帰って回答してもらい、後日回収した。その際、謝礼を手渡した。両方とも、回答は任意であることを伝えて実施した。

Table1 調査質問紙配布状況

	調査実施日	回収
専門学校	2010.11	144
鑑別所	2011.2～3	119
大学①	2011.11～2012.2	198
大学②	2012.10	179
配布数		640

Table2 専門学校および大学で実施した質問紙の構成

		自分自身への信頼感	抑うつに耐える力	家族構成・養育者	親からの被信頼感	反応スタイル	柔軟性	項目数
専門学校	質問紙A		○	○	○	○		77項目
	質問紙B	○	○	○	○		○	74項目
	質問紙C	○	○			○	○	71項目
大学	質問紙D	○	○					20項目
	質問紙E		○			○		44項目

Table3 記述統計

	男	女	不明	計	平均年齢
専門学校	46	87	11	144	19.95
鑑別所	98	8	13	119	16.62
大学	150	215	12	377	19.59

4. 調査の目的

平成21年版犯罪白書によれば、非行少年の検挙数が減少しているにもかかわらず、再犯率は上昇しており非行少年の再非行をいかに防ぐかが重要な課題となっている。本研究では、非行少年の立ち直りを支えるために、周囲がどのように支援すればよいのかについて検討することを目的とする。非行少年の立ち直りを支えるために、周囲の社会資源としてまず挙げられるのが家庭である。特に、主な養育者である親は、非行少年にとっても重要な他者であると考えられる。年齢が上がるにつれて、親からの影響は少なくなっていくことが指摘

されている（小保方ら，2005）ものの、やはり非行少年を家庭の中で支えていくためには、親の与える影響について検討する必要があると考えられる。そこで、本研究では、実施した調査に基づき、以下の3点を中心に検討を行った。

まず、非行少年の「抑うつに耐える力」と対処方略について、一般群と比較検討を行った。

次に、適応的な対処方略を促進する要因や、非行少年にとって難しいとされる「悩むことができる心の力（河野，2006）」である「抑うつに耐える力」を強化する要因について検討を行うために、「親からの被信頼感」と「自分自身への信頼感」

が「抑うつに耐える力」と対処方略に与える影響について検討を行った。

最後に、逸脱行為によって自らに不利益が生じているにもかかわらず、非行からの離脱について検討するために、非行少年の思考や行動の固執性や、環境への適応力といった柔軟性の高さ、身体症状化しやすい傾向について検討し、それらにかかわる要因についても検討を行った。

5. 方法

専門学校において実施した質問項目は、年齢・性別、「自分自身への信頼感」6項目（天貝，1995，1997），家族構成・養育者についての質問項目，「親からの被信頼感 33 項目」（泓ら，2007），「抑うつに耐える力」14 項目（近藤ら，2008），「反応スタイル」（松本，2008）30 項目，「柔軟性」21 項目，計 104 項目を 3 つの質問紙に分割して実施した。その結果，144 名（内訳は Table3 に示す）の回答を得られた。平均年齢は 19.95 歳であった。

鑑別所において実施した質問項目は、年齢・性別、「自分自身への信頼感」，家族構成・養育者についての質問項目，「親からの被信頼感」，「抑うつに耐える力」，「反応スタイル」，「柔軟性尺度」の計 104 項目であった。鑑別所に入所する少年 119 名（内訳は Table3 に示す）の回答を得られた。平均年齢は 16.62 歳であった。

大学において実施した質問項目は、「自分自身への信頼感」，「抑うつに耐える力」，「反応スタイル」の計 50 項目であった。大学生 377 名（内訳は Table3 に示す）の回答を得られた。平均年齢は 19.59 歳であった。各質問尺度への回答は全て 5 件法で実施し，家族構成および主な養育者については，該当する項目に丸をつける形式で実施した。

6. 結果と考察

6.1 「抑うつに耐える力」と対処方略についての検討

非行少年と一般少年において、「抑うつに耐える力」の高低に差があるのか，また，困難な場面における対処方略に違いがあるのかについて検討を行った。更に，「抑うつに耐える力」が対処方略に影響を与えているのかについて検討を行った。

「抑うつに耐える力」と「反応スタイル」の各尺度得点の高低を検討するために，専門学校生，非行少年，大学生の平均値の差の検定（Tukey 法）を行った（Table4）に示す。

その結果，「孤独に耐える力」では，非行群が最も高く，専門学校生，大学生と続いた（ $F(2, 630) = 39.79, p < .001$ ）。「不安に向き合う力」では，大学生が他の 2 群に比べて低かった（ $F(2, 628) = 10.74, p < .001$ ）。「強がらずに自己主張する態度」については，有意な差がみられなかった。対処方略については，「問題への直面化」において，専門学校生が他の 2 群に比べて高く（ $F(2, 381) = 6.50, p < .01$ ），「気分転換」では，大学生が他の 2 群に比べて高かった（ $F(2, 382) = 8.95, p < .001$ ）。また，「回避」および「ネガティブな内省」については有意な差はみられなかった。

これらの結果から，非行群では専門学校生や大学生に比べて，「一人でいても平気である」という感覚を強く持っていることが明らかになった。一方で，大学生では最も低く，大学生は一人でいることができないという意識を抱いていることが示された。非行少年は逸脱行為を行うことによって学校や社会から孤立しやすい。逆を言えば，集団からはみ出しても構わないという意識を抱く者が非行行為を行う，ということが考えられる。また，逸脱行為を行い，孤立する中で，「一人でも平気だ」と考えることで，孤独を感じないようにしていることが考えられる。平成 23 年の犯罪白書においても，再非行の要因として非行少年自身が最も多く挙げたのは，非行仲間との関係が続いていたことであった。非行少年は，自分の学校や家庭，地域

からの孤立を、非行仲間とつるむことによって紛らわしていることも考えられる。一般的に、誰かと一緒にいたいという欲求は、人の向社会的行動を促進すると考えられるが、非行少年においては、「一人でも平気だ」という意識を抱き、社会的孤立を厭わないために、あるいは社会的に孤立した他の非行仲間と関係を築くことによって、向社会的行動に結びつかないという難しさがあると間がえられる。

「不安に向き合う力」では、大学生が他の2群に比べて低い結果となった。大学生は専門学校生に比べて、就職など将来への目的意識が明確ではないことが考えられ、将来への不安に向き合いたくないという意識が表れていると考えられる。対処方略の「問題への直面化」においても、専門学校生が他の2群に比べて高いことから、専門課程に在る専門学校生は、大学生や非行少年に比べて、

より問題解決への志向性が高いことが示された。また、非行少年については、鑑別所という矯正機関に入所しているという状況が影響していることが考えられる。しかし、「問題への直面化」といった対処方略については、専門学校生よりも低く、大学生同様に、問題の解決を避ける傾向があることが示された。「気分転換」は大学生が他の2群に比べて高く、困った時や悩んだ時には、何か他の楽しいことに意識を向けやすいことが示された。

「回避」と「気分転換」は非常によく似た行動であるが、「回避」は自分が抱える問題をなかつたこととして切り捨てたり、目を背けたりすることであり、不適応的な対処方略であり、「気分転換」は困難な状況を乗り越えるために、一時的に気分を切り替えるといった対処方略で、一時的なものであれば適応的であると言える。大学は自由度が高く、サークル活動やバイトといった、余暇を楽し

Table4 抑うつに耐える力と反応スタイルにおける多重比較

		1. 専門	2. 非行群	3. 大学生	F 値	多重比較
抑うつに耐える力	孤独に耐える力	n	139	119	375	39.79 *** 2 > 1 > 3
		平均	2.72	3.16	2.36	
		SD	(.97)	(.76)	(.86)	
	不安に向き合う力	n	140	117	374	10.74 *** 1, 2 > 3
		平均	2.49	2.53	2.29	
		SD	(.60)	(.62)	(.60)	
	強がらずに自己主張する態度	n	140	118	373	0.91 n.s.
		平均	3.10	2.97	3.09	
		SD	(.94)	(.74)	(.93)	
反応スタイル	回避	n	91	117	179	2.02 n.s.
		平均	2.98	3.20	3.09	
		SD	(.70)	(.78)	(.85)	
	問題への直面化	n	90	115	179	6.50 ** 1 > 2, 3
		平均	2.56	2.19	2.27	
		SD	(.73)	(.82)	(.75)	
	ネガティブな内省	n	91	117	178	1.87 n.s.
		平均	2.77	2.95	2.93	
		SD	(.65)	(.73)	(.78)	
	気分転換	n	89	117	179	8.95 *** 3 > 1, 2
		平均	2.36	2.31	2.66	
		SD	(.69)	(.73)	(.83)	

*** $p < .001$ ** $p < .01$

みやすい環境にあることから、大学生において高くなったと考えられる。

6.2 「親からの被信頼感」と「自分自身への信頼」が「抑うつに耐える力」および対処方略に与える影響についての検討

「親からの被信頼感」と「自分自身への信頼」が、「抑うつに耐える力」と対処方略にどのような影響を与えるのかについて検討を行った。主な養育者の内訳を Table5 に示す。

6.2.1 非行群と一般群における「親からの被信頼感」と「自分自身への信頼」の比較

「親からの被信頼感」について、専門学校生と非行少年の平均の差の検定（ t 検定）を行った（Table6）。その結果、非行少年は専門学校生に比べて、親から信頼されているという感覚が低いこ

とが示された（ $t(206)=2.50, p<.05$ ）。非行少年は逸脱行為によって、周囲から否定的な評価を受けやすく、養育者からも信頼されていないという感覚を持っていると考えられる。

また、「自分自身への信頼」についても、専門学校生、非行少年、大学生の平均の差の検定（Tukey 法）を行った（Table7）。その結果、専門学校生が、専門学校生や大学生に比べて高いことが示された（ $F(2,628)=10.27, p<.001$ ）。非行少年は専門学校生に比べて、自分自身に対しても否定的な評価をしていることが示された。また、大学生も非行少年と同様に、専門学校生よりも低い値となった。これは、前述したように、大学生の多くは将来の目標も明確ではなく、「自分に何ができるか」、「自分は何がしたいか」といった自分自身に対する課題を抱えているためと考えられる。

Table5 主な養育者

	1. 専門	2. 非行群
父	5	12
母	84	95
きょうだい	1	1
祖父	2	5
祖母	2	1
その他	1	2

Table6 親(主な養育者)からの被信頼感

		1. 専門	2. 非行群	t 値	自由度
親からの被信頼感	n	93	115	2.50 *	206
	平均	57.99	53.37		
	SD	(12.68)	(13.71)		

* $p<.05$

Table7 自分自身への信頼感における多重比較

		1. 専門	2. 非行群	3. 大学生	F 値	多重比較
自分自身への信頼感	n	92	112	195	10.27 ***	1 > 2, 3
	平均	17.88	15.47	15.01		
	SD	(4.12)	(6.30)	(4.71)		

*** $p<.001$

6.2.2 「親からの被信頼感」と「自分自身への信頼」が「抑うつに耐える力」と対処方略に与える影響についての検討

「親からの被信頼感」と「自分自身への信頼」が、「抑うつに耐える力」と対処方略に与えている影響について検討するために、非行少年を非行群、専門学校生を一般群として群ごとにパス解析を行った (Figure1, Figure2)。その際、専門学校生のデータについては相関行列を用いて検討を行った。

分析の結果、非行群において、「自分自身への信頼」が「不安に向き合う力」と「強がらずに自己開示する態度」に対して正の影響を与えていた ($\beta = .43, p < .001, \beta = .23, p < .05$)。一般群においては、「自分自身への信頼」が「強がらずに自己開示する態度」に正の影響を与え、「親からの被信頼感」が「不安に向き合う態度」に正の影響を与えていた ($\beta = .36, \beta = .33, p < .001$)。一方で、両群ともに、「孤独に耐える力」に対する影響はみられなかった。

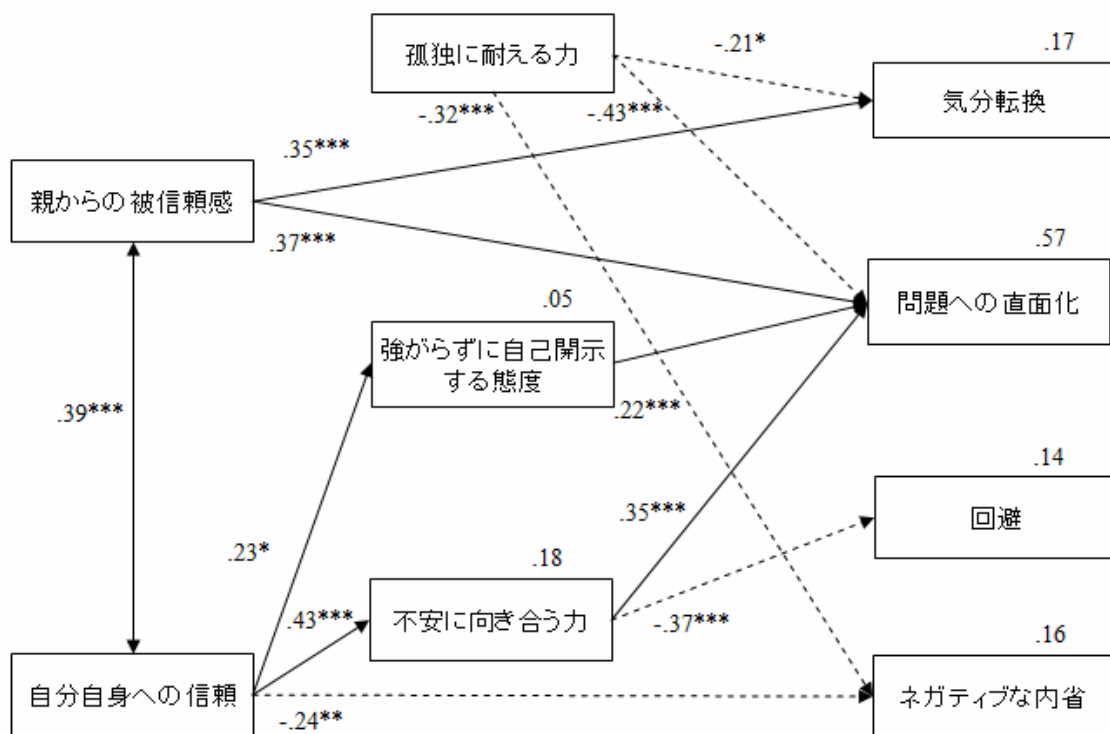
対処方略における「問題への直面化」に対しては、非行群において、「親からの被信頼感」から正の影響がみられ ($\beta = .37, p < .001$)、「自分自身への信頼」からは、「強がらずに自己開示する態度」および「不安に向き合う力」を介して、正の影響がみられた。一般群では、「親からの被信頼感」と「自分自身への信頼」から直接的な正の影響がみられた ($\beta = .33, \beta = .33, p < .001$)。非行群、一般群ともに、親から信頼されているという感覚や、自分自身への信頼感覚は、困難な状況に陥った時も、問題に向き合い、解決しようという対処方略を促進する要因であることが示された。つまり、周囲から認められたり、自分で自分自身を認めることは、問題解決といった適応的な対処方略を行うために重要であ

ることが示唆された。

さらに、非行群において、「孤独に耐える力」が「問題への直面化」と「気分転換」に対して負の影響を与えていた ($\beta = -.42, p < .001, \beta = -.21, p < .05$)。つまり、非行少年において、「一人でも平気である」という感覚が強いほど、困難な状況において問題解決をしようとせず、リラックスすることも苦手であることが示された。「孤独に耐える力」の高さは、非行少年における他者からの評価に対する反発の表れであると考えられ、非行少年は今直面しなければならない課題に向き合うことを避けるが、かといって気分を上手く変えることができずにイライラし、逸脱行為につながっていると考えられる。「孤独に耐える力」は一般群に比べて非行群の方が高く、「孤独に耐える力」が高すぎることは、周囲との対人関係を省みない、あるいは対人関係が上手くいかない状態が続いているといった対人面での不適応状態を示しているとも考えられる。

また、「孤独に耐える力」は、非行群、一般群ともに「ネガティブな内省」に対して負の影響を与えており ($\beta = -.32, p < .001, \beta = -.20, p < .05$)、「孤独に耐える力」が高いと、「自分自身に原因がある」と悩むといった自己内省を行いにくいことも示された。

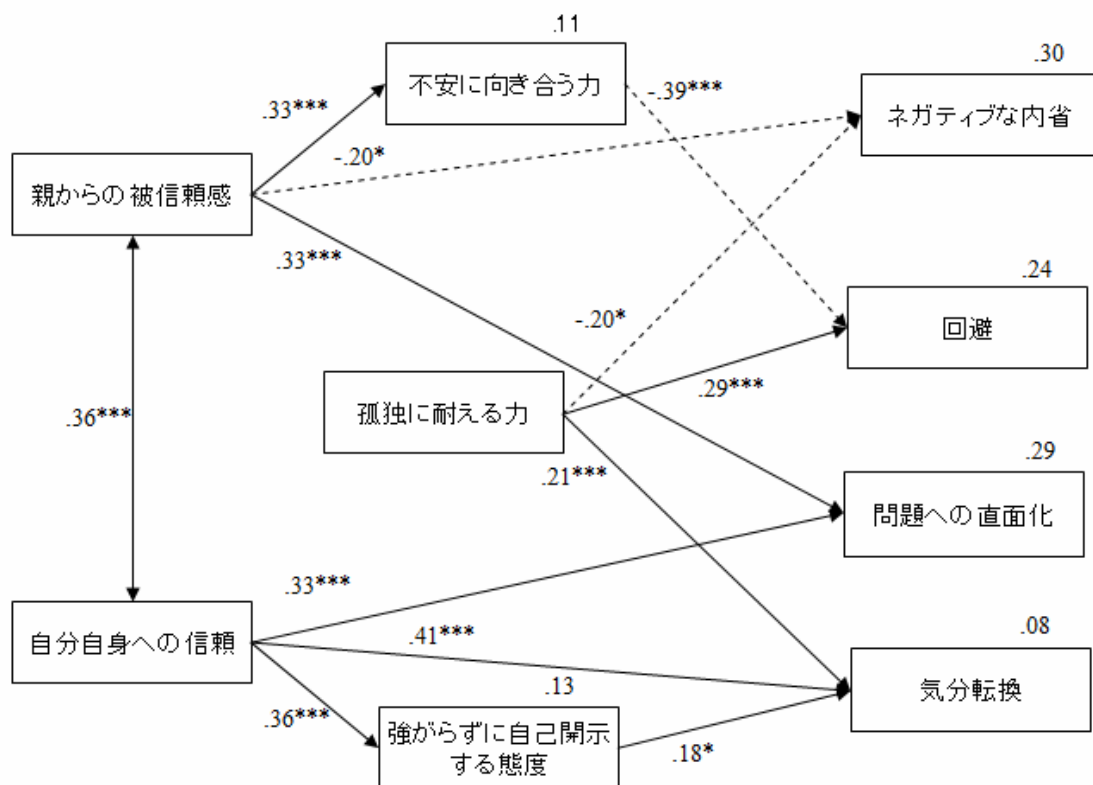
対処方略の「回避」に対しては、非行群、一般群ともに「不安に向き合う力」から負の影響がみられ ($\beta = -.37, \beta = -.39, p < .001$)、不安を抱える力が強いほど、「回避」を行いにくいことが示された。つまり、ネガティブな感情を抱えられる力は、人が困難な状況に陥った時に、問題を考えないようにするといった回避的行動を抑制することが示された。



GFI=.741 AGFI=.514 CFI=.419 RMSEA=.293 *** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

正の影響 →
負の影響 ---->

Figure1 非行群におけるパス解析結果



GFI=. AGFI=.514 CFI=.419 RMSEA=.293 *** $p < .001$ * $p < .05$

正の影響 →
負の影響 ---->

Figure2 一般群におけるパス解析結果

6.3 非行少年の柔軟性について

対処方略の「回避」において、非行少年と一般の若者の間に有意な差はみられなかった。非行少年は学業など、今取り組むべき課題を放棄するといった現実逃避傾向があると考えられるが、検討の結果、一般群よりも「回避」方略を多く用いるという結果は示されなかった。つまり、非行少年は、自分が問題から回避している意識はなく、現実逃避することによって生じる葛藤は抑圧され、考えないようにしているということが考えられる。したがって、ここでは、その葛藤が、非行などの行動や身体症状として表れているかについて、検討を行った。また、身体症状として表れやすい者は、現実逃避傾向があると考えられるため、対処方略の中の「回避」を行いやすく、「問題への直面化」を行いにくいと考えられる。

逸脱行為は、周囲からの評価を下げ、自分自身の環境への適応を阻むものであり、結果的に自分自身を追い込む行為である。しかし、再非行を繰り返す非行少年は、それでも尚、逸脱行為をやめることができない。非行少年は「一人でも平気だ」と考える傾向が高いことから、周囲の評価を意識していないのかということ、「親からの被信頼感」は一般の若者に比べて低く評価していることが示された。つまり、非行少年は「一人でも平気だ」と考えながらも、周囲の評価に対して敏感であることが考えられる。非行少年が逸脱行為をやめず、あるいはやめられず、不適応的な対処方略に固執する背景について、柔軟性と「親からの信頼感」および「自分自身への信頼」との間の関係から検討を行った。

ここでは、非行少年の思考や行動の固執性および身体症状化について検討を行うために、「柔軟性尺度」を作成し、非行少年を非行群、専門学校生を一般群として、以下の仮説を立てた。

仮説 1 非行群は一般群に比べて、柔軟性が低く、身体症状化が高い。

仮説 2 身体症状化は対処方略における「問題への直面化」と負の相関を示し、「回避」と正の相関を示す。

仮説 3 一般群と非行群ともに、柔軟性と「自分自身への信頼」との間に正の相関を示す。また、非行群において、「親からの被信頼感」と柔軟性との間に負の相関を示す。

まず、柔軟性尺度 21 項目に対して因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、固定値の推移状況（3.53, 2.23, 1.74, …）および解釈可能性から 3 因子解を採用した。全ての因子に低い負荷量を示した 4 項目を削除し、17 項目で検討を行った。項目内容から、第 1 因子を「柔軟・適応」、第 2 因子を「固執傾向」、第 3 因子を「身体症状化」と命名した。因子分析の結果を Table8 に示す。第 1 因子の「柔軟・適応」は、環境の変化へ適応する力や、柔軟に物事に対処する力を表し、第 2 因子の「固執傾向」は、思考や行動の固執性を表している。また、第 3 因子の「身体症状化」は、不安や緊張といったネガティブな感情が生じた時に身体症状で表出しやすい傾向を表している。

6.3.1 非行群と一般群の柔軟性の比較

非行群と一般群における柔軟性の各因子得点の平均の差の有無について検定（ t 検定）を行った（Table9）。その結果、「固執傾向」および「身体症状化」において、有意な差はみられなかったが、「柔軟・適応」において、有意な差がみられた（ $t(207)=3.82, p<.001$ ）。つまり、非行少年と一般群の間で、思考や行動の「固執傾向」や「身体症状化」には差がみられなかったが、「柔軟・適応」において、非行群の方が一般群よりも低い結果となり、仮説 1 は一部支持される結果となった。

Table8 柔軟性尺度因子分析結果(主因子法, プロマックス回転)

	F1	F2	F3	共通性
<柔軟・適応> $\alpha=.79$				
5. 誰とでも仲良くできる	.72	-.13	.12	.54
10. 考え方などのバリエーションが豊富な方だ	.65	.21	.00	.44
9. 人に対していつも気軽に返事ができる	.59	-.11	.17	.37
1. 臨機応変な方だ	.59	.05	-.15	.38
21. 新しいことにもすぐ慣れることができる	.58	.00	-.07	.35
19. 応用力があるといわれる	.55	.06	-.04	.31
14. 環境が変わっても割とすぐになじめる	.49	-.05	-.04	.26
<固執傾向> $\alpha=.61$				
16. 私は自分のやり方でしかやれない	-.03	.67	-.01	.45
11. 他人の考えが自分と違ってても、なかなか受け入れられない	-.06	.62	-.04	.38
12. いつも同じやり方で解決しないと気がすまない	.05	.51	.13	.32
18. 正解は1つだと思う	.18	.35	.13	.18
6. 正直言って人から何か教わるのは好きではない	-.01	.32	-.05	.09
<身体症状化> $\alpha=.76$				
20. 嫌なことがあるとお腹が痛くなることがある	-.08	-.12	.81	.64
8. よくお腹が痛くなる	.05	.03	.74	.55
3. 緊張するとトイレに行きたくなくなる	.13	.00	.40	.17
15. 逃げ出したいことがあると、気分が悪くなることがある	-.19	.19	.40	.30
13. 心配で夜眠れないことがある	-.04	.15	.30	.15
	F1	-	-.10	-.12
	F2		-	.29
	F3			-

Table9 柔軟性尺度のt検定

		1. 専門	2. 非行群	t 値	自由度	
柔軟性尺度	柔軟・適応	n	90	119	3.82 ***	207
		平均	3.02	2.62		
		SD	(.74)	(.75)		
	固執傾向	n	89	117	0.34	204
		平均	3.68	3.64		
		SD	(.60)	(.70)		
	身体症状化	n	89	117	0.77	204
		平均	2.96	3.05		
		SD	(.88)	(.91)		

*** $p<.001$

6.3.2 柔軟性と対処方略の関連

柔軟性に対処方略との間の相関係数を群ごとに算出した (Table10)。その結果, 非行群において, 「固執傾向」および「身体症状化」と「回避」と

の間に正の相関がみられた。つまり、思考や行動の「固執傾向」が高い者ほど、「回避」方略を行いやすく、「身体症状化」しやすい者ほど、「回避」方略を行いやすいという結果が示された。しかし、「問題への直面化」との間には有意な関係はみられず、仮説2は一部支持される結果となった。一

方で、くよくよ悩むといった「ネガティブな内省」と「気分転換」については、「固執傾向」と「身体症状化」との間に正の相関がみられた。つまり、思考や行動の「固執傾向」が高い者ほど、悩みやすく、「気分転換」を行いやすいという結果が示された。

Table10 反応スタイルと柔軟性の相関

		柔軟性			反応スタイル			
		柔軟・適応	固執傾向	身体症状化	回避	問題への直面化	ネガティブな内省	気分転換
柔軟・適応	一般群	—						
	非行群	—						
固執傾向	一般群		—					
	非行群		—	.371 ***	.439 ***		.318 ***	.277 **
身体症状化	一般群			—			.420 **	
	非行群			—	.255 **		.475 ***	.335 ***
回避	一般群				—	-.245 *		
	非行群				—	-.459 ***	.195 *	.200 *
問題への直面化	一般群					—	-.257 *	.320 **
	非行群					—	.263 **	.403 ***
ネガティブな内省	一般群						—	-.100
	非行群						—	.331 ***
気分転換	一般群							—
	非行群							—

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ ※有意な数値のみを示す

6.3.3 柔軟性と「親からの被信頼感」および「自分自身への信頼」との関連

柔軟性と「親からの被信頼感」および「自分自身への信頼」との間の相関係数を算出した (Table11)。その結果、非行群、一般群ともに、「自分自身への信頼」と「柔軟・適応」に正の相関がみられた。つまり、環境の変化に適応したり、柔軟に物事に対応できると感じている者ほど、自分に対して自信があることが示された。「柔軟性」と「自分自身に対する信頼」において、非行群は一般群より低かったことから、非行群の方が一般群に比べて、環境への適応に失敗した経験が多く、失敗体験が自分に対する自信の低下につながって

いるということが示唆された。

また、非行群においてのみ、「親からの被信頼感」と「柔軟・適応」との間に有意な正の相関が、「固執傾向」との間に負の相関がみられ、仮説3は支持された。「親からの被信頼感」については、非行群よりも一般群である専門学校生の方が高く、逸脱行為が親からの評価を低め、そういった周囲の評価が「自分は上手く対処できる」といった感覚が持てないという自信の低下につながり、更なる逸脱行為を行うといった悪循環があることが示唆された。つまり、逸脱行為によって周囲の評価が下がれば下がるほど、現在の自分の対処方略に固執し、状況に応じて上手く立ち回れなくなるとい

う悪循環があると考えられる。一般群と非行群との間で、「固執傾向」の値に差はみられなかったが、非行少年における現在の思考や行動への「固執傾向」は、一般少年のそれと比べて、より不適応的なものであることが考えられる。そのために、非行群においてのみ、「親からの被信頼感」と「固執傾向」との間に負の相関関係が示されたと考えられる。しかし、非行群は一般群である専門学校生

に比べて年齢が低く、親からの影響をより受けやすい可能性も考慮する必要がある。一方で、「親からの被信頼感」と「自分自身への信頼」との間に正の相関がみられたことから、周囲の評価が高い者ほど、自己に対する評価も肯定的であることが示された。つまり、周囲の評価は年齢や境遇に限らず、自己評価に影響するものであることが改めて示された。

Table11 柔軟性、親(主な養育者)からの被信頼感、自分自身への信頼の相関係数

		柔軟性			親からの 被信頼感	自分自身への 信頼
		柔軟・適応	固執傾向	身体症状化		
柔軟・適応	一般群	—				.364 ***
	非行群	—			.225 *	.310 ***
固執傾向	一般群		—			
	非行群		—	.371 ***	-.212 *	
身体症状化	一般群			—		
	非行群			—		
親からの被信頼感	一般群				—	.360 *
	非行群				—	.224 *
自分自身への信頼	一般群					—
	非行群					—

*** $p < .001$ * $p < .05$ ※有意な数値のみを示す

7. 総合考察

非行少年と一般の専門学校生、大学生について検討を行った。

柔軟性においては、専門学校生に比べて非行少年の方が柔軟な対処や環境へ適応する力が低いことが示された。思考や行動の固執性および、心理的葛藤を身体症状に置き換える「身体症状化」については差が見られず、今後の検討課題である。

また、非行少年は親からの評価が低く、親から信頼されていると感じている者ほど、「自分自身への信頼」が高いことが示された。非行少年にとっても、親は重要な他者であり、信頼されていると感じることが、少年の自信を高めることが示され

た。しかし、非行少年は自らの問題行動によって、周囲から評価されることは少なく、逆に否定されることの方が多い。このような状況が非行少年の自信低下に繋がり、更なる問題行動を助長するといった悪循環があることが示唆された。重要なのは非行少年におけるこのような悪循環をいかに断ち切っていくかということである。非行からの離脱は「ある一定の条件」が揃うことによって成しえるという視点に立てば、非行からの離脱のために、周囲がいかにサポートしていくかを考えていく必要がある。非行少年は自らの逸脱行為によって学校などから孤立しやすく、疎外感を感じやすい。非行少年の孤独に対する耐性の高さは、逸脱

行為によって孤立しやすい非行少年の、自分自身の疎外感の否定あるいは反発である可能性もある。このような状況の中で非行少年の孤立を防ぐためには、親など周囲の他者から信頼され、受容されるという経験が必要であることが示された。親から信頼されているという感覚は、非行群、一般群ともに問題と向き合うことを促進しており、親からの評価の重要性が示された。また、問題に向き合うことを促すためには、不安を抱え、素直に自己表現できるといった、「抑うつに耐える力」が必要であることが示された。しかし一方で、非行少年の「孤独に耐える力」の高さが、「周囲の評価が下がっても気にしない」ために逸脱行為を促進している可能性が示された。また、「孤独に耐える力」は、気分転換や自己内省を妨げる要因であることが示された。非行少年は、自分の問題を省みず、かといって気分を変えることもできず、その葛藤を逸脱行為によって解消していることが考えられる。つまり、非行少年は適応的な意味で“遊ぶ”のではなく、何かから逃げるために、あるいは不安や葛藤を解消するために“遊ぶ”のではないかと考えられる。非行少年にとって“遊ぶ”ことが逸脱行為につながったり、深夜徘徊、性非行など、時に“遊ぶ”ことが逸脱行為そのものである場合もある。したがって、非行少年の立ち直りを支えるためには、打ち込めるような趣味を見つけたり、自分を持て余した時に上手くリラックスするスキルを身につけたりすることを促していくことも有効な支援の1つであると考えられる。

最後に、本研究の問題点としては、「抑うつに耐える力」の中で、「孤独に耐える力」の強化要因について十分な検討が行えなかったことが挙げられる。今回検討した中では、「孤独に耐える力」に対して影響を与える要因がみられず、今後の検討が必要であると考えられる。

今後は、面接調査によってケース検討を行うこ

とで、臨床的視点からも非行からの立ち直りを検討していく予定である。

8. 引用文献

- 天貝由美子 (1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響 教育心理学研究, **43**, 364-371.
- 天貝由美子 (1997). 中・高校生における心理的距離と信頼感の関係 カウンセリング研究, **29**, 130-134.
- 泓 厚子・緒賀郷志 (2007). 高校生の被信頼感が信頼感に及ぼす影響について 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, **56**, 215-224.
- 法務省法務総合研究所編 (2009). 犯罪白書 平成21年版.
- 法務省法務総合研究所編 (2011). 犯罪白書 平成23年版.
- 近藤淳哉・岡本英生・白井利明・栃尾順子・河野 莊子・柏尾眞津子・小玉彰二 (2008). 非行からの立ち直りに関する抑うつに耐える力とソーシャル・ネットワークとの関連 犯罪心理学研究, **46** (1), 1-13.
- 河野 莊子 (2003). 非行の語りと心理療法 ナカニシヤ出版
- 河野 莊子 (2006). 非行の語りと心理療法―「抑うつに耐える能力」を中心に― 現代のエスプリ, **462** 号 至文堂 181-188.
- 松本麻友子 (2008). 拡張版反応スタイル尺度の作成 パーソナリティ研究, **16**, 209-219.
- 小保方晶子・無藤隆 (2005). 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, **16**, 286 - 299.
- Sampson, R.J., & Laub, J. H. (1993). Crime in the making? Pathways and turning points through life. Cambridge, MA:Harvard University Press.